

## 卷 頭 言

本学の建学の精神は、「行学の二道に励み候べし」と説示された日蓮聖人のお言葉に集約される。修行と学問、換言すれば実践と理論の二道である。この精神は全ての日蓮門下の不動の道標でもある。

本学は慶長九年（一六〇四）身延第二世日遠の築いた西谷檀林より出発しているが、その淵源は身延第一四世善学院日鏡（一五〇七―五九）に求めなければならない。日鏡は弘治二年（一五五六）五〇歳の時、身延西谷に庵室を設けて隠棲し、その号をとって善学院と名づけ、所化を集めて三大部を講じた。これが後の西谷檀林の初めである。まさに日鏡は法器人材の育成に多大な貢献をのこしていったのである。したがって、平成十七年は本学開創四五〇年を迎えることになる。

さて今日、日本各地の大学においては、少子化問題によって大学そのものの存亡が危惧され、早急な変革を余儀なきものとされている。同時に教育を重視した大学へと転換していくことが求められてもいる。もとより大学は真理探求の場であることは論をまたない。特に二一世紀はあらゆる構造・価値観を見直す時期ともいわれている。一国の問題や一分野の研究視点では対応できない問題もおきている。しかし、研究は細分化する反面、総合化・国際化も進んでいる。

こうした状況下において本学の研究所では、身延中興の祖と仰がれている第二一世行学院日朝（一四二二―一五〇〇）を総合研究の柱とさだめた。日朝の著述は古来より約六〇部七五〇余巻と伝えられ、

「身延文庫」所蔵は約六〇〇巻を数える。研究所においては昨年より「日朝上人研究会」を発足し、毎月一回の例会を開き今日にいたっている。

さて、本号は共同テーマを設けず、所員の個人研究に委ね六編の論稿を載せさせて頂いた。

一つは文化四年（一八〇七）、甲府の法華寺において、日蓮宗の僧日宣と神主十名との対論記録について考察したものである。二つには、日蓮聖人三五歳頃に著した『爾前二乗菩薩不作仏事』をとりあげている。本書は、二乗の不作仏は菩薩の不作仏である。したがって真の十界成仏は法華経以外にない、と論じている。筆者は叡山文庫所蔵の慈覚大師円仁作と伝える『速証仏位集』の閲覧の機会を得た事により両書を検証した結果、『爾前二乗不作仏事』は『速証仏位集』の引用で終わっている、と指摘している。三つには、日蓮聖人の身延入山に関して考察したものである。筆者は、聖人の佐渡流罪以前の歩みは「動」的なもので、身延入山はあえてその「動」を捨て去り、「静」を選んだ、と述べ、さらに人里離れた身延山中の地に自己を置くことは、自己の存在状況においても、また門弟らとのつながり方においても、佐渡流罪のそれを復旧しようとしたのではないか、と指摘し、その点を論証・考察している。四つには、現況のラオス仏教の調査報告である。筆者はラオスのルアン・プラバン地区の寺院の現況とその地域の經典の保存状態などを主たる調査目的として行ったものである。五つには、ディーパンカラシュリージュニヤーナの『大経集』に引用される正法念処経について考察したものである。筆者は『大経集』に引用されている同経の引用文の和訳とそのチベット語訳を提示し、引用された文章と經典の文

章にみる相違、またチベット語の翻訳も異なっている点を指摘している。六つには、本学の学生・菊地伸洋君の卒業論文「仏像修復の技術的工程」を掲載したものである。本学の東洋文化研究所の付属施設である、仏像制作・修復室においては、柳本伊左雄教授の指導のもと、制作技術・開発・工夫が一定の成果をあげている。その左証がここに載せた論文である。

最後に、翌一四年は立教開宗七五〇年をむかえ、新たな出発を期し、研究所も努力していきたい。

平成十三年二月二十五日

身延山大学東洋文化研究所長

宮 川 了 篤 識